

2022年 8月14日 精霊降臨節第11主日礼拝

メッセージ「互いに平和をもたらし合う」

牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 9章42-50節

キリスト教では、先に天に召された方々を偲ぶのは11月の「召天者記念礼拝」（「聖徒の日」）とされていますが、日本では一般的に8月のこのお盆の時期が、ご先祖様を供養する季節かと思えます。外では、袈裟姿で走り回っているお坊さんの姿をよく見かけますし、お墓参りに来ている人たちの姿もよく見かけます。とはいえ、新型コロナの感染拡大「第7波」の最中ですから、今年も盆踊りは開催されなかったり、家庭内で感染者や濃厚接触者が出たので、家にお坊さんに来てもらうのをキャンセルしたりなど、いつもとは異なるお盆の様です。

「ご先祖様」と一口に言っても、私自身にしても、子どもたちにしても、実際に会ったことのある祖父母や曾祖父・曾祖母までならばともかく、写真でしか見たことがなかったり、墓石に刻まされている名前でしか見たことがない方については、いくら話を聞いても、自分自身とのつながりというものは、なかなか実感しにくいものです。しかし、理屈の上では、それらの方々がいなければ、今の私達もまた生まれて来なかったわけです。それにまた何かの拍子に、それらの「ご先祖様」の新しいお話を聞いたりして、急に身近に感じられるようになることもあったりするかもしれません。

かつて確かにこの世に生きて、そして今を生きている私達にまで命のバトンをつないできた先人たち、その人たちの肉体は土に還りましたが、その人たちの霊、魂はどこに行ったのか。……「人は死んだ後、どうなるのか」という問題は、何千年も昔から、世界中のあちこちで、多くの人々が考えてきたテーマであったようです。今回の聖書の箇所にも、そのような話題が書かれていました。人は生きている間にどのようなことをしてきたかによって、死後の行き先が決まる。悪いことをした人は地獄に行き、善いことをした人は天国に行く。いわば、「悪いことをしたら罰を受けて、善いことをしたらご褒美をもらえる」というこのような考え方は、ある意味では分かりやすく、世界中にあったようです。小さい子どもにも分かりやすい理屈な

ので、「そんな悪いことをしたら、罰があたりますよ」ということで、いわば「脅し」のように、子どもたちに向かって語り継がれてきたのだらうと思います。

さて、今回の「マルコによる福音書」では、イエス様の言葉として、記されていますが、このような考え方は、イエス様よりもずっと昔から、ヘブライ語聖書に記されているユダヤ教の伝統の中にもあって、古代ユダヤの人々の生活にしみついていたのでと考えられます。43 節や 45 節などに出てくる「ゲヘナ」とは、「地獄」とも訳されていましたが、もともとはエルサレムの都の城壁の南側にあった「ヒンノムの谷」を意味するヘブライ語です。深い谷だったようですが、時代を経るにつれて、神による最後の裁き、審判がその谷でなされ、その谷に落とされると考えられるようになってきたそうです（田川建三）。またゲヘナでは消えることのない火で焼かれ続けるというイメージも、古くからありましたので（イザヤ 66 章）、イエス様の生きた紀元 1 世紀頃には、エルサレムの町の中で、いつも煙が出ているゴミの山のことも「ゲヘナ」と呼ばれていたそうです（山口里子）。おそらく目で見ても、匂いを嗅いでも、できればそこに行きたくない、という印象を強く与えられた場所だったのでと想像することができます。

さて、今回のイエス様の言葉は、一見すると、とても厳しいことを言っているように思えます。「仲間の一人をつまづかせる者は、ゲヘナの消えない火の中に投げ込まれる。それよりは、海に投げ込まれる方がましであり、片手、片足、片目になった方がましである」。という話です。ですが、もちろん、これもそのまま書かれている通りに、「手足を切ったらいい」という話ではありません。イエス様の語った言葉を人々が聞いて、びっくりして、その驚きをまた人から人へと聞き伝えていく間に、どんどん大げさな表現になっていって、このような形に落ち着いたのだらうと考えられます。

まず、この話の前提として理解しておきたいのは、この当時、手や足、目などに障がいを持っていた人たちは、病気の人たちと同じく、神から見放され、罰を受け、祝福を受けられず、宗教的に穢れている「不浄」な人たちであると考えられていたということです。そのような人たちはゲヘナに行くのが当然で、決して天の国には行

けないと考えられていました。また手足を切断したり、目を傷つけたりするのは、紀元 1 世紀の当時、法的な刑罰として実践されていたことでした。体に欠けた所がなく「健全」な体こそが、「清い」状態であると考えられていた社会の中で、仲間の一人を躓かせるのであれば、むしろ自分が犯罪者として手足や目に罰を受けて、自分の体が「不具・不浄」になって天の国に入る方がいい、とイエス様は言われました。それは当時の社会常識をひっくり返す発言であり、差別されていた障がい者たちへの偏見を逆転させる発言でした。「神の前に正しくあること、清くあることに固執するあまりに、本当に大切にすべきことを、見誤ってはいないだろうか」…。イエス様の言葉は、今を生きる私たちにも、問いかけてきています。

後半 49 節と 50 節は、前半に登場するゲヘナの「火」と傷の治療に用いた「塩」とをキーワードとして、前半の話から連想された形で続けて記されていますが、前半とは全く異なっている別の話です。「塩は良いものである」とありますが、わざわざイエス様から言われるまでもなく、塩は人々にとっての生活必需品でした。料理の調味料としてだけではなく、冷蔵庫もない時代ですから、食料を保存するためには塩漬けにしておく必要もありました。さらに「塩」は、ヘブライ語聖書では、仲間であること、契約関係にあることの象徴でもありましたし、ヘブライ語における食卓での「塩の分かち合い」は、日本語の「同じ釜の飯を食う」という言葉と同じく、親しい仲間を表す表現でもありました。50 節には「塩は良いものだ。だから塩気を無くさないように。自分の中に塩を持ちなさい。そして、それによって互いに平和でありなさい。互いに平和をもたらし合うようでありなさい」と記されています。腐敗を防ぐため、また互いに必要不可欠なものを与え合い、補い合いなさい。そのために「単に塩気を持っているだけではなく、それを無くさないように、保ち続けなさい。それによって、互いに平和をもたらし合うことができるのだ」ということなのでしょう。

しかし、よく分からないのが、その前の 49 節「人は皆、火で塩気を付けられねばならない」です。ギリシャ語の直訳では「火によって塩漬けされる／塩漬けられる」ですが、これは何を言っているのでしょうか。この 49 節を「人は皆、火によって塩

味を取り戻す」と訳している聖書もありました(本田哲郎)。人は、火によって自分の中にある塩味、つまり「低みから発想する感性」を取り戻す、と言うのです。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ということわざではありませんが、低みから発想する感性、小さい子どもの感性、病気を患っていたりする時の感性、仕事がかうまく見つけられなかったりする時の感性など、それぞれの時にはハッキリと胸に抱いていたはずの感覚、感性を、いつの間にか忘れてしまって、見失ってしまっている時があります。しかし、そんな私たちがお互いに平和をもたらし合う者となるためには、そのような感性、塩気を自分の内に取り戻しておく必要があります。そしてそれは時に自分の意にそぐわない、「火」によってなされるとあります。「火」……。自ら好んで火の中に飛び込んでいく人はいないでしょう。しかし、否が応でも火の中に巻き込まれていくということが、誰にでも、往々にあることではないかと思います。

今は亡き「ご先祖様」たち、先に天に召された方々の人生もまた、必ずしも順風満帆なものではなかったでしょうし、今を生きている私たちもまた山あり谷あり、それぞれに火の中を歩む時もあるのではないかと思います。しかし、そのような折々に、私たちはそれぞれ、自分の内にも確かにある塩味、低みから発想していく感性に立ち返っていくことが出来るのではないのでしょうか。

神の国はどこから来るか。平和はどこから実現するか。それは穢れていると見なされている人たちと交わらないようにして、自分の体を清く正しく保つことによって、実現するものではありません。むしろ、そのような発想から自由に解放されて、低みの中、火の中におられる神様に従うこと、そこにおられる神様が共に働かれることによって、私たちはお互いに平和をもたらし合う者へと変えられ、用いられていくのだと思います。

明日は8月15日、かつての大戦に日本が敗れ戦争が終えられた日です。戦争の愚かさや平和について思いを馳せる季節として、私たちは日々神様から与えられている命を大切にして、歩んでいきます。